

岩石筈が夥しく存在し、或は樹型を伴う等頗る形が不規則なものである。前者に属するのは万野新田の風穴・人守村の人穴・駒開の風穴・十里木の氷穴・青木ヶ原熔岩流中にある富士・富岳・大室・本栖・神座等の風穴・西湖・鳴沢等の蝙蝠穴・鳴沢の氷穴・精進御穴・竜宮・檜丸尾にある鐘山洞穴等である。後者は印野の胎内がその適例である。吉田胎内には樹型が伴つて居り、熔岩鍾乳の表面に黒く炭素粉が附着している。以上の外火山抛出物としては宝永火口附近や精進登山口の三合目から四合目の間等諸所に火山弾が見られる。

(2) 富士五湖 富士山の北東麓から北麓を巡つて北西麓までの間に、山頂を中心として半径一六糠の円周上に連なつてある山中河口・西・精進・本栖の諸湖を総称して富士五湖と云うのであるが、元来これ等のものは富士火山噴起の為に北部御坂山脈その他他の山塊との間に生まれた一連の新月形の水面であつたのが、北東部は山中丸尾の熔岩流に埋きとめられて独立した山中湖となり、北部は劍丸尾熔岩流のために埋かれて河口湖が生まれ、西では青木ヶ原熔岩流・大室山熔岩流に三分されて西・精進・本栖の三湖を構成したのである。

これ等五湖を表示すると下表のようになる。

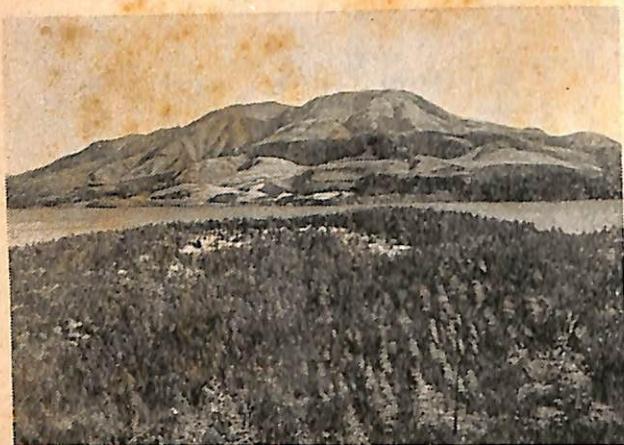
以上の地学的な景観を修飾するものは植物であるが、三、七七六米の山頂から、裾野は南北四五糠、東西三〇糠の広域に拡がる植物の垂直的分布は極めて標式的である。下から(1)草原帶、(2)落葉広葉樹帶、(3)針葉樹帶、(4)カラマツ帶、(5)ハンノキ・ヤナギ

湖名	高度(米)	最大深度(米)	面積(陌)	水色(ル番号)	透明度(米)
本栖湖	九〇二	一三八	四八七	藍色湖(4)	一四、六四
精進湖	九〇五	一六	八七	—	—
西湖	九〇四	七六	二三〇	綠色湖(6)	八、〇〇
河口湖	八三〇	一五、二	五七八	—	—
山中湖	九八二	一五、六	四五〇	綠色湖(7)	七、〇〇

帶、(4)高山植物帶が見られ、その上に無植物の焼石地帯が山頂まで続いている。又一方植物分布には地域的な差異が見られ、特に顯著なものは北西側の「丸尾」を被う青木ヶ原で、針葉樹を主とする原始林が広域に発達している。その他南西斜面にも相当な原始林が標高一、〇〇〇米と二、六〇〇米の間に発達し、その下部は広葉樹の天然林の間に人工林も混在している。更に丸尾に発達した諏訪の森の赤松林や、忍野のハリモミ林は小面積ではあるが熔岩流に基く地質の変化によるものであり、南東麓のヒノキ純林と共に、特徴のあるものである。

富士の動物は哺乳類四一種、鳥類一二八種、爬虫類一二種、両棲類八種、魚類三三種、並びに昆蟲類二六九種を含む節足動物四〇八種等が今日までに知られ、富士山の高度に従つて温帶動物や亜高山帶動物が分布している。鳴禽類の極めて豊富なことは富士の特徴で、岳麓樹海地方の蕃殖は特に著しい。昆蟲類も筆す

べきであり、蝶類にはアサギマダラ・ヒメシロチヨウ・フジミドリシミ・大名セセリ・ミスジチョウ等美しいものが多い。又盛夏須走登山道の樹洞にヤマネの営巣するのをみつけたり、大宮口登山道常緑樹帯にエゾビタキ・トラツグミ・サンコウチヨウ等の鳴音を聞くことが出来るのも富士の景趣の一つである。



神山、駒ヶ岳と芦の湖 箱根火山がもつ四つの火口丘中この神山と駒ヶ岳の二つが代表的であり、この写真では両者殆んど重なつてゐるが、向つて左が最高峯の神山(1439米)、右が駒ヶ岳(1327米)である。他の二つである双子山は更に右の方で見えない。前二者は立派なトロイデで火口原湖芦の湖の北東側に聳えている。

箱根 団地

ここは標式的な複式火山である箱根火山の一帯であるが、神山・駒ヶ岳等の中央火口丘に風光明媚な芦の湖を配し、金時山・明神岳等の外輪山をめぐらした小団地で、草原や噴氣孔や温泉群を含む明朗な変化の多い景観を呈している。

この火山の出現する前の基盤は第三紀の海底火山であるが、その多量の噴出物は足柄層群と呼ばれて火山礫や凝灰岩や集塊岩の海中堆積を示している。その後の造山運動・火山活動により火山堆積物は遂に海面に現われ、古期外輪山の基底を形成するに至つた。其の後金時山熔岩・幕山熔岩(区域外)並びに長尾峠・御殿場方面の寄生火山熔岩が噴出後、第一期のカルデラ成生があり、新一期外輪山熔岩及び軽石流の堆積後第二期のカルデラが成生され、遂に神山の中央火口丘が発達し、湯ノ花沢・硫黄山・小湊谷・早雲地獄等の数次の爆発を経て概略現在の地形となつたものである。

箱根一帯の森林は豊富な樹種を持ち落葉や常緑の広葉樹の美しい林相を随所に見ることが出来、大湊谷附近のアセビ群落等は特色があり、又旧東海道の杉並木は史蹟として特に有名である。仙石原はハコネサンショウウオの棲息地で、その名称の発生地であり、芦の湖はオシドリの渡来地で知られている。

この火山は外輪山・裾野・カルデラ(陥没火口)・火口丘・火口原・火口原湖・火口瀬・爆裂火口・噴気孔・温泉等の火山景観の要素をみんな備えているので、火山の教室と云うことができる。これ等の代表的な要素を解説すると次のようになる。

外輪山—最高峰は金時山（一、二二三メートル）、明神岳・明星岳。

鷹巣山・要害山・鞍掛山・山伏峠・三国山・丸山岳等がある。

何れも丘陵性で草原又はハコネザサの群生地が続き、箱根独特の景観を呈している。

カルデラ—第一次外輪山に囲まれる第一次カルデラは東西六、五糠、南北一二糠で、面積は二四、五〇〇畝ある。

火口丘—最高峰は神山（一、四三八メートル）で、駒ヶ岳・上二子・下二子と共に四つの中央火口丘は何れもトロイデの小規模なドーム（円頂丘）である。

火口原—大体馬蹄型で、北方は仙石原、北東は宮城野原という火口原湖—芦の湖の湖面は標高七二三メートル、最深部四三、五メートルの四~六で藍色～緑色湖、PHは七、一の中性で湖底から湧出し、透明度は一二メートルである。湖畔は杉並木が立派であり、冬はオシドリの群棲が見られる。

火口瀬—北口の早川は伏流となり、火山礫の下を潜つて逆川となつてゐる。南口は須雲川である。

爆裂火口—神山の北東山腹に大湧谷・早雲地獄・湯ノ花沢等があり、水蒸気や硫化水素を噴出している。

噴氣孔—硫黃山噴氣孔は芦の湯の北西一糠駒ヶ岳の東麓急斜面にあつて、中央部から硫黃臭のガスが噴出し、降雨の後は特に多い。駒ヶ岳炭酸孔は駒ヶ岳の西南中腹にあつて僅かばかりの水を湛えているが、硫化水素及び炭酸ガス噴出の為分解して出

来る粘土で被われてゐる。

なお大湧谷は神山爆裂火口の遺跡で、實に箱根噴火山の名残りである。大体二部分に分けて観察し得るが、南東のものを地獄沢と云い盛に硫氣を噴出し、硫黃華の沈澱が見られる部分で、その中に黝色の泥水を湛え、間歇的に泥土と熱水を噴出する泥火山式のものである。又水蒸氣や熱氣を噴出する所に石室を設けて溪水を注ぎ温泉として、強羅及び仙石原に送つてゐる。北西のものを閻魔台と云い、南西～北東方向に排列する八個の噴氣孔から薄々と音を発して盛に水蒸氣及び硫氣を噴出し、噴氣孔附近に硫黃及石膏が沈澱している。附近的岩石は一般に噴氣の為に作用されて分解し、灰白色の粘土となつてゐる。

温泉—昔から箱根七湯と呼ばれるものは、湯本・塔の沢・宮の下・底倉・堂ヶ島・木賀・芦の湯であるが、現在は小湧谷・強羅・仙石原（上湯・下湯）姥子等を加えて十二湯とされている。これ等を火山活動の新旧による温泉の熱源分布状態や湧出箇所の基盤岩質や位置と泉質との関係を示すと次の通りである。

位 置		早川の渓谷に沿うもの					
温 泉 名	湯	本 塔 の 沢	宮 の 下	底 倉	堂 ケ 島	木 賀	
基盤岩質	凝灰岩	凝灰岩	集塊岩	集塊岩	凝灰岩		
泉 質	單純泉	單純泉	弱塩類泉	弱塩類泉	單純泉	弱塩類泉	
泉 温	七一度	五一 度	五二 度	六四 度	一七五 度	一四五 度	一四五 度

位置	中央火山系のもの	中央火山周辺の硫氣孔から引いたもの
温泉名	芦の湯	早雲地獄(大地獄)
泉質	清澄な 硫黃泉	大地獄(元湯)
温	姥子	小地獄
泉質	硫黃泉	下湯・元湯
温	強羅	小湧谷
泉質	塩類泉	酸性塩類泉
温	酸性	酸性收斂
泉質	塩類泉	綠礬泉
温	六六度	八二度
泉質	四五度	六五度
温	四五度	八二度

海岸から大きく裾野をひいて聳えた富士、しかも煙をふいていた富士に対する憧憬と信仰は原始人の昔から濃厚なものがあつた

であろう。富士をとりまいて発掘される土器や石器の分布からみても既に太古の頃に我々の遠い祖先の中には富士を仰いで生活を営んでいた。その頃から富士にちなむ伝説や物語は数多く語りつたえられたであろうが、富士が文献にあらわれたのは元明天皇の和銅六年(七一三年)の詔で撰述された常陸風土記が最初である。次いで万葉集には富士に因んだ歌が數首みられる。最初の富士登山は役小角と伝えられているが、古代人は山嶽の威容に接して靈感にうたれ、山嶽そのものに人間以上の神性を肯定し、遂に神社の創建を見るに至るのが普通であつた。富士の浅間神社も当然の発展であるが、山容の端麗な富士に女性の神でしかも容姿秀麗な木花開耶姫が祭神として祀られたことは深重な意義がある。浅間神社は山頂を奥宮とし、山麓には各地に浅間神社が最も著名であるが、富士を仰ぐ山麓には各地に浅間神社が生れるのが自然で、事実村山、三日市、須山、御殿場、須走、吉田、勝山、河口など

にも鎮座を見るのである。

富士崇敬の思想は浅間神社の創建と共に、神聖な修行場として、富士の登行を企てるに至るのが当然である。平安朝にはいつて修驗道の発展に伴つて富士登山は漸次盛になり、鎌倉時代には益々顕著になり室町時代には更に発達し、江戸時代には若干趣を異にしてきたが富士講として発展し富士登山は隆盛を極めた。明治維新にはいつてこの種の登山は一時寂寥を告げたが、近年来新しい自然愛好の登山が漸次増加し、富士の登山は昔時と異つた形で今後益々盛になるであろう。

太古以来あらゆる面で広く人間生活と交渉をもつた富士には数えつくせない程の歴史と伝説がつたえられている。古くから最も著名なものの一つは浅間神社の祭神木花開耶姫にちなむ伝説とそれに似た竹取物語である。今の富士郡吉永村にある竹取塚の伝説と共に伝えられるこの物語は名山富士の山頂に何かの魅力を物語るものということもできよう。天女の羽衣の伝説も著名である。美保の松原で漁夫の伯渠から羽衣を返してもらった天女は、羽衣をなびかせて天女の舞をまつて天高く消えて行つた。富士山は高い独立峰で典型的な雲がかかる。その一つに山頂にかかる笠雲があるが、これが飛びはなれると中空高く吊雲になる。この姿は丁度羽衣の天女の舞を連想させる。昔の人たちも美しい富士にかかるこの吊雲を見て羽衣の物語を創作したのであろうか。

富士をとりましては近年来ホテルをはじめ各種の近代施設が増加して来たが、しかし今でも特色のある古風な聚落が数えられ

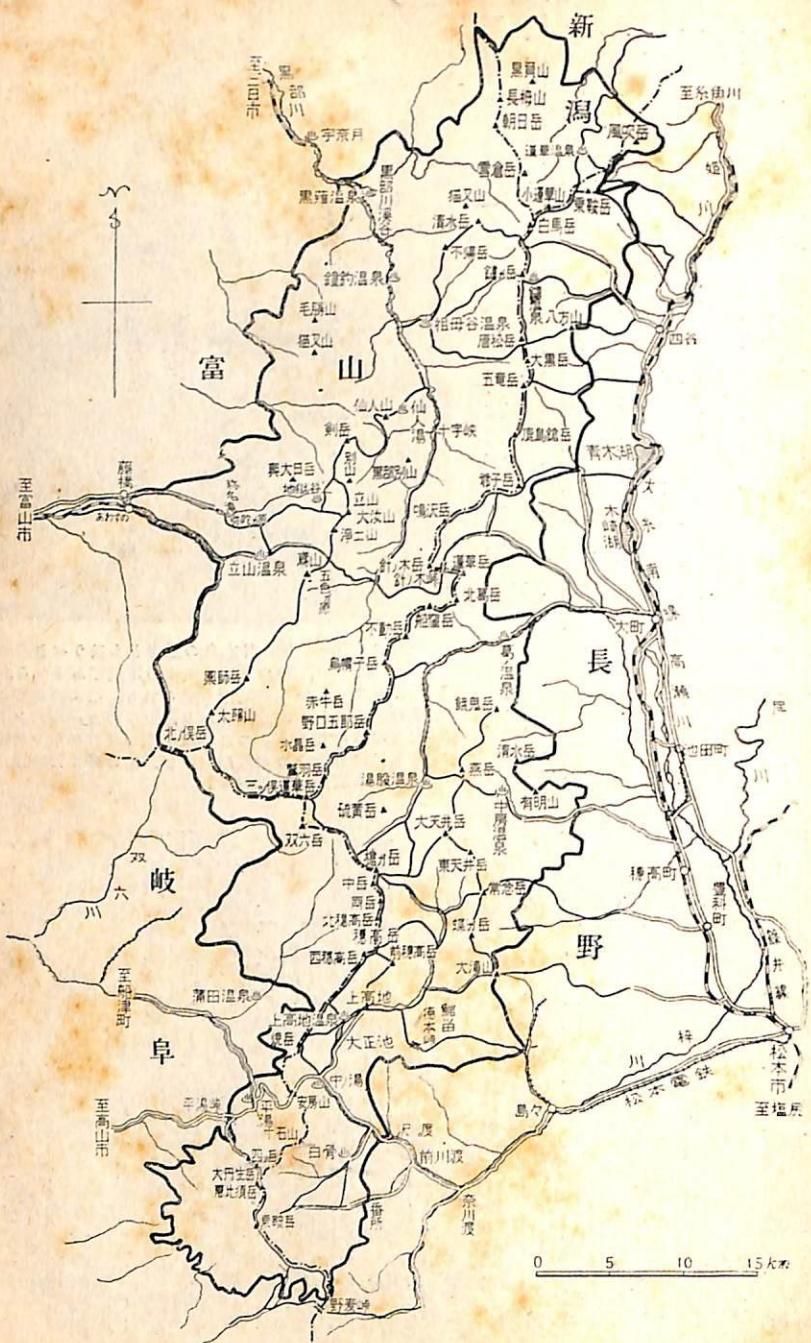
る。中でも忍野、鳴沢、根場、根原、猪之頭など夫々建築に特色があり、豪落の雰囲気にも独特の味がのこされていて興味が深い。

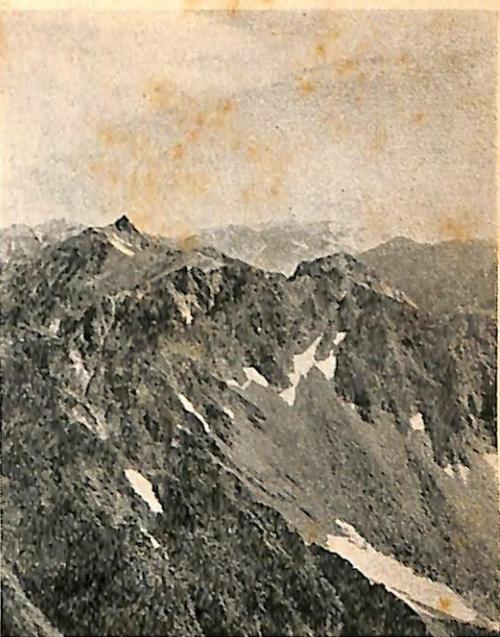
西交通の要となり、元和四年には箱根の宿をおき、関所を整備して警戒を怠らなかつたのである。今この芦の湖畔の関所跡や、所々にのこる旧箱根街道の杉並木は昔時の数々の説話をつたえているようである。

箱根は我国の国立公園の中で道路宿泊施設その他最も完備した自然休養地であるが、その歴史も亦極めて豊かである。それは箱根が関東に通する交通の要衝であるからであるが、古くから古典にも記載されている。箱根路のことが最初にみられるのは万葉集である。しかし当時の交通路は芦の湖を経由するものでなく、はるか北方の御殿場の方を迂回していた。この道が所謂箱根越の旧道の線に変つたのは桓武天皇の御宇で、日本紀略には延暦廿一年五月の條に富士山の噴火のため從来の足柄路を閉塞し、代りに箱根路を利用することが記されている。富士の活動と箱根路とが関連をもつことは面白いが、その後箱根が歴史的に著わってきたのは、源頼朝が伊豆に挙兵して鎌倉に幕府を営むようになつてからである。箱根神社の別當寺である金剛王院の僧行実と頼朝は知己の関係から、彼が再挙の祈願は箱根神社にかけられ、治承四年の石橋山の敗北のあとも箱根に身をよせたりした関係で、鎌倉に幕府を開いてからは、箱根神社や金剛王院の繁栄は目覚しいものがあつたと伝えられる。当時は箱根路と共に足柄路もすぐに復旧して共に利用されていたが、社寺の繁栄と鎌倉幕府の関係でこの頃から主客が転倒して、箱根路が交通の幹線になつたものである。その後徳川家康が江戸に幕府を置くに及んで、要衝箱根は東

中部山岳国立公園

指定 昭和9(1934)年12月4日
面積 169,768畝





槍・穂高連峰 日本島の屋根とも云うべき連峰で山塊であるが、3000米級の峻峰の連続であるから、我が国でも珍らしい氷蝕地形も見られる。この写真では遠景の槍のカールが立派であり、近景のカールパンドも大きなものである。これ等壯年期の侵蝕を示す岩盤や雪渓にはカモシカや雷鳥が遊び、雪の融けた跡は高山植物のお花畠がひろがる。

この公園は所謂日本アルプスのうちの北アルプス一帯を占め、長野、富山、新潟、岐阜の四県に跨つてゐる。その中権となつてゐる飛驒山脈は、地体構造上西南日本内帶の北端に当り、古生層の褶曲山脈中に進入した花崗岩や石英斑岩の大底盤(バソリス)が巨大な断層塊となつて聳立したものである。これはアメリカの国立公園グランドチートンの大断層線にも匹敵し、日本では勿論最高最大のものとして大蓮華・白馬の東側を形成する岩盤の急傾斜面が、この断層崖(比高二、〇〇〇メートル)の最高部分を見せてゐる。その南方は鹿島館(二、八九〇メートル)や五竜(二、八一四メートル)の岩

九〇メートル)の両岳を盟主として北に白馬(二、九三〇メートル)、杓子、鐘木(二、九〇三メートル)、鹿島館(二、八九〇メートル)、爺子(二、六七〇メートル)、針木(二、八三一メートル)、烏帽子(二、六二七メートル)、鷲羽(二、九二四メートル)、薬師(三、〇二〇メートル)、燕(二、七六三メートル)、大天井(二、九二二メートル)、常念(二、八五七メートル)、南に焼(二、四五八メートル)、乗鞍(三、〇二六メートル)、北西に立山(三、〇一五メートル)、鰐(三、〇〇三メートル)等の高峰を列ね、槍のビーカー・穂高の峻峰・白馬の大雪渓は北アルプス中の一大偉觀である。又梓川の上流に沿い穂高・焼岳等の高峰に囲まれて狭長な盆地となつてゐる上高地は、大正四年焼岳の爆

峯が連なり、更に大町以南では常念山脈の有明山(二、二六六メートル)並びに越鬼岳(二、六四七メートル)の断層崖が聳え、疎らな針葉樹林に被われた岩壁となつてゐる。これ等東麓がフォツサ・マグナの西辺となつてゐるが、その内部(西側)には標高三、〇〇〇メートル級の巍然とした大連嶺、大小の峰頭鋸齒の様な満壯年期の地貌、一~二糠に及ぶ雪渓や雪窪(窪谷)の小規模なもの)のよな雪蝕地形、豪壮な峡谷等一通りのアルプス要素が揃つてゐるので、本区域はアルプス型山岳公園の代表として適切なものである。中部山岳の地質としては前記の古生層や深成岩の他に新生代噴出の火成岩・新期熔岩等から成り、高さ二、五〇〇メートル以上の山だけでも四十以上を数え、三、〇〇〇メートルを抜く槍(三、一八〇メートル)、穂高(三、一

発のために熔岩が梓川の流れを堰き止めて出来上った大正池と共に幽幻な氾濫原を造りあげた。焼岳の誕生の前は梓川の水は蒲田川・高原川・神通川へと日本海の富山湾へ流れていった筈で、穗高岳の下には大正池・宮川池・田代池等の池沼・牧場景觀もなかつた。北アルプスの北西端には立山連峯があり冬期積雪の多い裏日本にあるので雪田・雪窪の発達が著しい。我が国では歐米の高山のように広瀬な氷蝕谷や氷河湖の典型的のものはないが、小規模なカールや氷蝕地形が飛驒山脈に見られることは氷河時代のほのかな香を感じさせる。この地帯の氷蝕地形として代表的なものは白馬岳葱平附近の條痕・三俣蓮華や槍ヶ岳附近の羊状岩・立山や槍ヶ岳の氷堆石丘・五郎岳の大規模な堆石堤の上部にある小規模な氷蝕湖等であり、カールには立山・薬師・東側の頂上部のものは残雪と岩壁の美に優れ、槍・穂高連峰は最も大規模に発達し、中俣岳や針の木岳では山頂の一方だけに発達し、黒岳や薬師岳は標式的に山稜の片側に並んでいる。一般に分布は非対称で東側や北東側に多い。カールの密度が大きくなり山稜や山頂が壯年期的に氷蝕されて尖峰や鋸齒状山稜となることは我が国では稀であるが、その代表的なものは槍・穂高・立山の雄山大汝等に見られる。谷氷河地形としては穗高の岳沢・滴沢、槍の横尾谷・槍沢等があげられる。

この地帯の火山地形としては立山の彌陀ヶ原や五色ヶ原、鶴羽岳の西にある雲の平等がメサであり、上高地の槍ヶ岳が活火山として稀なトロイデで、アルプス型以外の要素もある。又槍ヶ岳

の北には鶴羽岳の頂に近く小火口湖があるがこれは花崗岩の狭い山稜に出来た小さな火山錐の火口に水を湛えたので、この様な景觀は他では見られないものである。これ等の火山活動の余勢は諸所に硫氣孔や温泉となつて現われているが、立山の地獄谷の硫氣孔は我が國最高の所にあり、噴氣は猛烈である。中房温泉の硫氣孔は小規模であるが、花崗岩の間から急に硫氣ガスが噴出する奇觀を呈し、又白馬鑓ヶ岳の山腹にある温泉は海拔二、〇〇〇米以上に亘つて、我が國で最高位のものとして珍らしい。尚このほか中部山岳の峡谷には至る所に天然の温泉が湧出しているが、その主なものをこの区域の内外に亘つてひろつてみる。

(一) 黒部渓谷に沿うもの

宇奈月—(区域外)含塩炭酸泉。

黒薙温泉—宇奈月温泉の源泉。

新鐘釣—無色透明の塩類泉、七四度。

鐘釣—石灰岩の基盤から湧出する炭酸泉。

祖母谷—硫黃泉、九七度。

(二) 常願寺川に沿うもの

立山温泉—硫化水素泉、四九度。

(三) 高瀬川に沿うもの

葛温泉—上流に湯股の噴泉丘(天然記念物)

(四) 蔦山麓

中房温泉—無色透明の硫黃泉と弱塩類泉。

(五) 梓川に沿うもの

上高地温泉一角閃花崗岩の裂縫から湧出、無色透明の單

純泉、四三度。

(4) 乗鞍山麓

白骨温泉—無色透明の炭酸泉、五〇度。

中ノ湯温泉—安房峠の東。

(5) 飛驒側

平湯温泉—安

房峠の西。

蒲田温泉—蒲

田川に沿う

区域外。

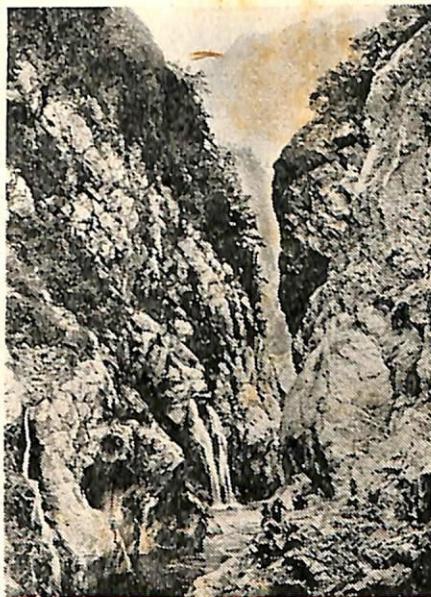
中部山岳の特色であ

る峡谷と懸谷は、歐米

の氷蝕谷に見られる冰

河懸谷とは異なり、河

蝕の若返りによるもの



黒部峡谷 我国峡谷の雄で黒部の谷は、立岳・白馬岳・飛騨山脈の連山の間を流れ、薬師岳・白馬岳の西麓に及び峡谷・碧潭。岳に達している。山岳の延長約80kmに亘り、3000m級を呈する。花崗岩や岩壁が、谷底にまで達する。これは黒部谷が断層谷であり、谷底に大きな岩塊がある。これは黒部谷が断層谷であり、谷底に大きな岩塊がある。

これ等の傑出した山岳・渓谷・池沼・温泉等の地貌を飾るものは森林である。しかも区域の大部分は天然林であつて阿寒・大雪山にもおとらぬ林相は本州中緯に見るものであつて、殊に草原に始まつて落葉広葉樹帯に移り、櫻着とした針葉樹帯となり、やがて灌木帶から遂にハイマツ帯にうつる森林植物帯の推移の見事なことは

山山脈の連山の間を流れ、薬師岳の下から白馬岳の西麓の間におり、数箇所の峡谷を形成し、碧潭と弁流との連続を示し、これに合流する劍沢・内藏助沢・御前沢等何れも合流点附近に於て深奥な峡谷となり飛瀑を躍らせる懸谷となつてゐる。これは最近の地

質時代の地盤運動によるものであつて、黒部峡谷を初め飛驒山脈の諸谷が山体と共に極めて新期の隆起を受けたが、その上昇の量は立山附近で500mを超えているらしく、これに伴う激甚な浸食が特殊な廊下を造つたものである。溪谷にはこの他に双六谷・高瀬川・龍川・大所川・称名川等があり、巨瀑として称名川上流に直下四〇九メートルを三段に分れて奔下する称名の滝がある。

美しい渓畔を造成していることは、清澄な梓川の流れと四面を飾る明神・穂高・霞沢・焼岳等の秀峰と相倚つて世にも稀な美観を呈し、キヤムブ場の環境として理想的である。ブナの森林は大山や十和田湖には劣るが一帯の中腹に可成り広範囲に分布している。アルプス一帯の広葉樹で代表を選ぶなら誰もがシラカンバを推すであろう。この白々とした端正な幹と明朗な枝葉は高山風景とは切離せないものであると共に、誰の目にもつき易い為に到るところ皮を剥がれ無惨な褐黒色の幹をさらしてるのは甚だ遺憾である。上高地附近でシラカンバと共に最も特色のあるものは天然記念物のケショウヤナギであろう。これは日本では梓川の僅かな区域に限られて生育するもので、朝鮮の鶴綠江沿岸のものと近縁であり、早春紅の芽先と眞白な花と共に見られない特色である。モミ・ツガ・トウヒ等針葉樹の天然林は黒部川源流、乗鞍岳を始め到るところに鬱蒼とした森林となつてゐるが、大雪山や十勝岳のものには及はない。しかしこれ等の陽光を洩らさない程茂った針葉樹の原始林こそは、多くの登山者のオアシスである。ナカマド・ミヤマハンノキ・ダケカンバ等山頂附近の灌木帯に混じるミネザクラや下草のキヌガサソウ・オオサクラソウ等の美しさは下界に得られぬものである。

二、七〇〇米以上のハイマツの美觀はこの公園の森林景観のもつ重要な特色で、三俣蓮華・黒部五郎・雲の平を始め各所にハイマツの海をつくつてゐる。そのほか立山には立山杉の偉觀があり、黒部にはネズコの大木が多く見られる。

これ等の自然環境の下にクマ・サル・カモシカ・オコジョ・雷鳥等野生動物も豊富であるが、これ等のうち羚羊・雷鳥等は天然記念物に指定されており、高山蝶にも珍らしいものが多い。又鳥類の種類も多く上高地では特にマガモの繁殖が著しい。

ここでは前記のケショウヤナギ群落のほか池沼には水生植物・湿原植物の群落があつて特異の景観を呈する。なお南面した穂高・前穂高両山が六百山・霞沢山と相対して焼岳を西に長嶺山を東にめぐらした環境は、堰止湖大正池の景観と共に比類稀な景観であり附近一帯は名勝と共に天然記念物として指定されている。

そのほか白馬連山の高山植物帶、中房温泉の膠状硅酸及硅華、高瀬川の上流湯俣温泉並びに安曇村白骨温泉の噴湯丘及球状石灰石等が指定天然記念物である。

以上でこの区域の自然景観は概ね示された筈であるが残した景観を北から拾うと次のようである。

長梅山・朝日岳（二、四一八メートル）雪倉岳（二、六一メートル）—国立公園区域の最北端にあつて尾根通りのなだらかなそして谷の急に下りてゐる山である。雪倉岳は大雪渓を藏しているが緩やかなスロープで起伏し、ムシトリスミレ・ウルツブソウ等お花畑が美しい。

後立山連峠—唐松岳（二、六九六メートル）大黒岳（二、四〇五メートル）五竜岳・鹿島鎧岳・爺子岳・岩小屋沢岳（二、六三〇メートル）鳴沢岳（二、六〇一メートル）赤沢岳（二、六一八メートル）針の木岳（二、八二〇メートル）等がこの連峠の主なもので、そのうち鹿島鎧と針の木が

最も傑出している。この連峯は高原に乏しく峻高な複尾根であつて不帰・八峯キレット等難所があるが、立山連峯の眺望には絶好である。

毛勝山（二、四一四米）——標高は比較的低いが後立山や立山からの遠望にその偉容を誇つており、小黒部谷は峡谷と滝の連続である。

抜戸岳（二、八一三米）笠が岳（二、八七七米）——飛驒側の山岳として優れ、高山方面からの眺望は絶佳である。

乗鞍岳附近——番所の原から気持のよいスロープで頂上まで続く信州側の斜面はおだやかな高原である。一、五〇〇米附近はシラカシバの疎林で夏の散策にもよいが、林内を縫うスキーは絶好である。

中部山岳は所謂日本アルプスを代表する北アルプスを占める一帯であるが、日本アルプスの名は神戸に居た英國の宣教師ウエストンが、一八九六年にロンドンで紹介した著書に題された名である。日本アルプスは彼によつてはじめて内外に同時に宣伝されたといつてよいほど、中部山岳には人文の跡がすくない。

石器時代の昔には山麓をとりまいて各地に遺物が発見され、しかもそれが高い山脈をはさみ乍らも形式や製作の上で互に共通している。石器時代の人たちにとつては高峻なアルプスは左程の障害でなく、渓谷以上に尾根を通路とする交流があつたものと解される。しかし乍ら狩猟から漸次農耕に傾いてきた我々の祖先の轡

生式土器の時代並にこれにつゞく古墳築造の時代になるとアルプスとの関係は石器時代よりはるかに稀薄になつてきただのである。日本アルプスを横断するようなことは殆んど関係のないことになつた。しかし乍ら高峻な山岳に対する崇敬の念は、やがて山岳に神靈を肯定して崇拜するようになり、山岳は神靈の止まる場所として理解されることになった。この概念と祖先崇拜の心情には一脈通ずるものがあり祖神を祀つて自らの愛護を願うのが常であつた。今の安曇郡の一帯には安曇族が来住したのであらうか、彼等の祖神が穗高見命であることを思うと穗高神社や穗高の山名には深い因縁が肯定されるようである。そのほか乗鞍には信濃側に朝日神社あり、飛驒側に御獄神社がある。

中部山岳の中で立山は他のものと些か趣を異にする。それは立山が古くから交通路のひらけた北陸路から遠望される位置にあつたためでもあらう。立山が最初に文献にみられるのは万葉集で、当時はタチヤマとよばれていた。タチヤマとなつたのは室町以後のようである。立山の頂上には雄山神社が祀られている。普通当初山頂に祀られた神社は山麓に下つて、山頂にその奥宮をのこすのが常であるが、立山の雄山神社だけは山頂を下つていない。昔のままの形態をのこしている点で興味が深い。立山には非常に古くから修業僧の登山があつたらしく、立山の地獄は平安朝の頃すでにその存在が知られていたようで、今昔物語には勝妙滝（今の称名滝）と共に地獄の記事が記載されている。とはいへ一般に言つて中部山岳が世人に知られるようになつたのは極めて新しい

といつてよい。中部山岳も他の山岳と同様にその最初は修業僧の手によつたものであるが、その時代は役行者、行基、空海などの時代と比較して新しい。乘鞍嶽は近代まで人跡をしりぞけた魔所であり、著名な奇僧円空が延宝・貞観の頃（一一六八〇）銛で立木に仏像を刻み乍ら開山したと伝えられ、槍ヶ岳は文政九年（一八二六）に播磨上人が開山したものである。現在乗鞍には平湯峠から登山道が頂上附近の鶴ヶ池（二六八〇メートル）附近まで開設され、我国最高の自然車道で平湯や高山方面から夏季利用は盛大を極めているが、これも戦時中軍の開設したものである。従つて中部山岳国立公園は極めて新しく知られた地帯で、人文も比較的特色が豊かでないが、特に看過がせんのは平湯温泉の聚落である。平湯の盆地の中出来たこの温泉聚落は特に厚い大きな栗板葺の屋根に特色があるが、ゆるやかな勾配と共に美しい山村の聚落をつくつてゐる。

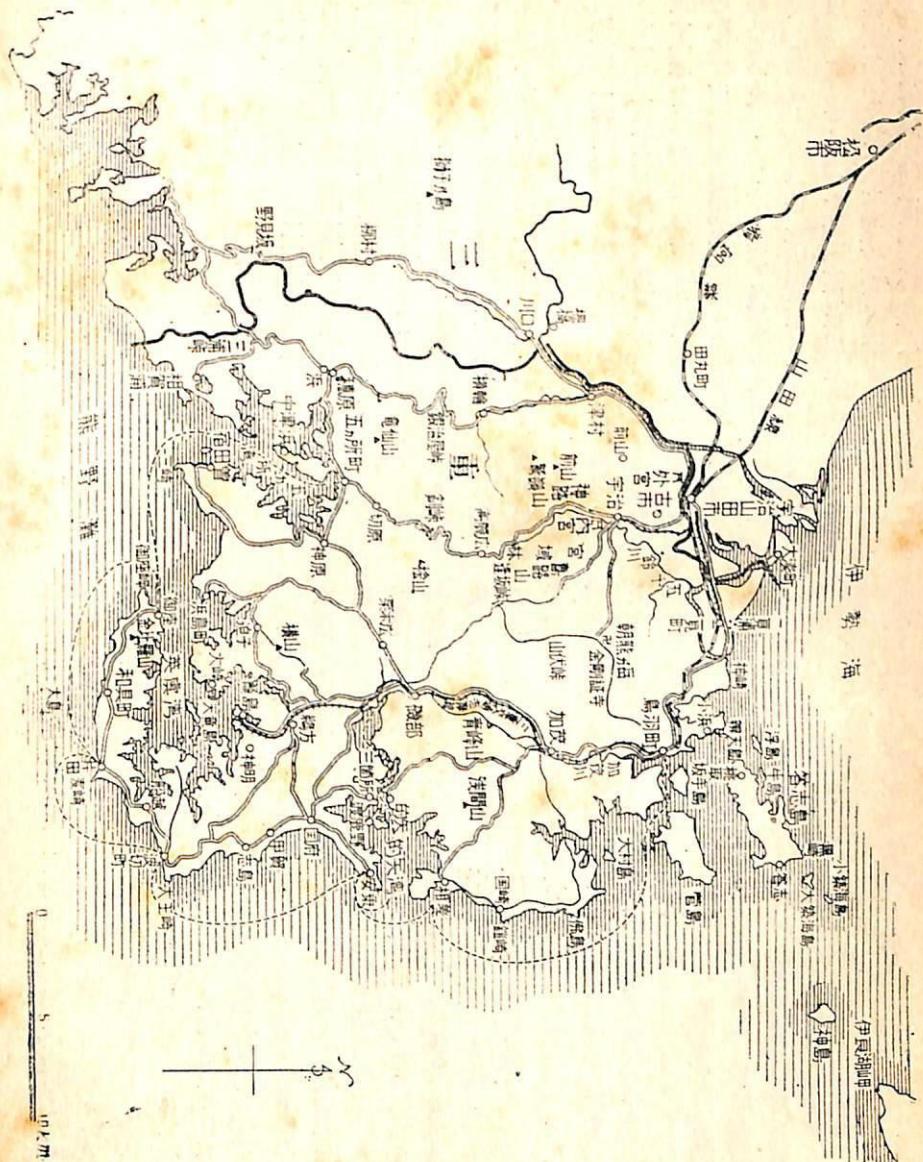
中部山岳の物語で一番痛快なのは佐々成政のアルプス越えて、しかもそれは十一月又は十二月といわれてゐるので冬期の壮拳であつた。天正十一年の冬、越中の国主佐々成政は壯兵五十余人の随て、ひそかに富山の居城を出で、佐良々々越をして大町方面に出たといわれてゐる。この日本アルプス横断の壮拳はあまりに著名であるが、そのコースは今の立山温泉からザラ岬を越えて平の小屋に出て、更に針ノ木峠を経て大町に出たものとされてゐる。秀吉の軍に包囲されて孤立無援になり陥落も近い状態になつた成政は、最早徳川家康と結ぶほかないと考へて、この壮拳を

敢行し、駿府に達して家康に謁し、更に尾張に織田氏訪ねて出兵を請うたとされている。しかし家康の出軍にいたらなかつたため折角の壮拳も何等の効果をみず、遂に降伏を余儀なくされたといわれてゐる。成政が果して冬期のアルプス越を決行したかどうかについては若干疑問の余地がないとしないが、兎に角日本アルプス横断の壮拳として中部山岳を飾る物語として伝えられてよい。昔時の日本アルプスは東西をさえる自然の障壁ではなくて、太古の時代にはすでに東西に通する道路がひかれていったことは前述した通りであるが、その後も梓川流域を通り、安房岬を越えて平湯に出る道には鎌倉街道の名があり、当時の他の街道と共に飛弾方面と鎌倉をつなぐ通路であつたと考へられるので相当古い歴史を有するアルプス横断道路であつたといえる。むしろ江戸時代になつてからのことだが中部山岳ではほとんどわかつてない状態である。山頂を極めることは新しいことであつたが、アルプスを横断する道路は大古から中世にかけてある程度ひらけていたものと考えてよいであらう。その意味からは佐々成政のザラ岬越も肯定されるといえよう。

伊勢志摩国立公園

指定 昭和 21 (1946) 年 11 月 20 日

面積 52,036 陌



この国立公園は三重県の志摩の国に伊勢の一部を含む一帯で隆起と沈降とを繰り返した構造地帯である。その縁辺はリアス式海岸となり、岬角・島嶼・海岸段丘等頗る変化に富んだ地貌により、内湾は静寂な入江となり、外洋は海蝕の激しい波濤景観を呈している。又北部には伊勢神宮の広大な宮域林の天然林があり、人工

的ではあるが英虞湾の真珠養殖は、この公園の添景として主要なものである。



伊勢神宮の森林 伊勢神宮の社叢に続く背後の山一帯は神宮宮域林である。気候は温暖で雨量も豊かであるから、宮域林はアカガシ・イチガシ・クス・シイ等の常緑広葉樹の生育が旺盛で、一部はアカマツ・スギ等を交えた天然林に、クロマツの人工林も加わっている。よく保護されてきたので、その植生は概ね自然状態を呈している。

この地帯は構造上日本列島の中央構造線に平行な、東西に走る水成岩層から成り、南西日本外帯に属している。地質は北から南にかけて御荷鉾系の変成岩帶・秩父古生層・中生層(ジュラ紀)・第三紀層と云々順序で配列している。この一帯は紀伊山脈の東端が志摩半島となつて海に落ちるところであるが、その山系の余波は伊良湖水道をへだてて渥美半島に再現し、中部地方に及んでいる。北辺の宮川はこの構造線に従つて綾谷となつており、この公園を北上して宮川に入る五十鈴川は横谷となつていて、全域に亘つて起伏する五〇〇米級以下の丘陵は、水蝕による壯年期の複雑な地形を示し、これが沈降して出入りのはげしいリアス式海岸を形成したのであるが、的矢湾・伊雑浦・英虞湾・大王崎一帯は第三紀層を基盤としてその上に洪積層を置いた低い台地が連なり、海蝕台地として代表的なもので、英虞湾・五ヶ所湾のような多島海と共に沈降と隆起とを繰り返して出来た地形である。これ等の山陵・台地の間には平地の発達が極めて少く、宮川と五十鈴川の附近を除いては、内湾の所々に狭少な耕地・聚落をつくるにすぎず、外洋に面する海岸は二見浦・国府附近の砂丘の他は波濤が岬を囁み、懸崖や離礁に海蝕の様相が見られるところが多い。

気候は温暖で年平均温度一六度余、極寒一月にも平均五度を下らず、年雨量は一、〇〇〇耗と二、六〇〇耗前後であるから、植物の生育に好適な環境でことに神宮宮域林はアカガシ・

イチイガシ・シラカシ・シイ・クス等の常緑広葉樹にスギ・アカマツ等を交えた天然林が繁茂し、一部にはクロマツその他の人工林を交え、合計一四〇科九〇〇種（蘿苔類以下を除く）に及び、ドウダンツツジの自生地やツバキの純林などの美しい植生も見られる。海岸には海浜植物の群落が発達し、和具町海上の大島などが代表的である。なお暖地海浜の特産物として古来詩歌にうたわれたハマユウ（ハマオモト）は各所に趣をとておらず、ボウラン・ヤマモガシ・アミシダ等この地方を分布の北限とするものも少くない。

海岸地方では海産物が頗る豊富で海藻類やボラ・イセエビ・アワビ等の漁撈に賑わい、英虞湾や五ヶ所湾は真珠貝の養殖に好適である。

この地帯の主要景観を個々にあげると次のようである。

朝熊山（五五三メートル）—秩父古生層の構造山地で、六〇〇メートルに足りないが、この公園第一の高地で富士山を始めとして東海十八州を大観することが出来ると云われる程、展望台に絶好である。鳥羽附近—この公園北東端の答志群島は、愛知県の渥美半島と相対して伊勢湾口を扼し、懷に波静かな鳥羽湾を抱いている。この一帯は古生層のリアス式海岸で湾口部は離島となつた典型的な沈降地形である。海産物が豊富で釣や島めぐり等の觀光中心地であり、日和山や樋の山遊園は多島海風景のよい展望台である。附近の答志島は志摩第一の大島で周囲約二四秆、全島御荷鉢系の変成岩風景を見せている。

生浦湾附近—大村湾・麻倉島などを湾口に控えた生浦湾は奇岩翠松の静かな海景に秀で、湾を出て鍋笠瀬の先端を南に廻ると、菅崎までは丘陵の裾を太平洋の波が洗う豪壮な眺めとなり、東端の国崎は神宮の神饌のアワビを採取する伊勢海女の名に知られる。

青峰山（三三六メートル）—志摩一帯を天観する絶好の地で、中生代ジユラ紀層の隆起台地である。この他の矢湾に近い浅間山（一九九メートル）も展望台として優れてゐる。

的矢湾・伊雑ノ浦—菅崎・安乗崎を門戸とする的矢湾は古来船人たちの憩いの島として、避難港として名高い渡鹿野をめぐつて狭い水道となり、巾数百メートルに満たない水帶は更にいく度か屈曲して伊雑の浦に至り、志摩の国を殆んど横断しているリアス式沈降海岸であるが、基盤は第三紀層で洪積層を乗せた低段丘が発達しているから、隆起沈降を繰返したことを証している。

附近にはカキ・ウナギ等が多く棲息している。伊雑宮—鬱蒼たる社林をもつ内宮の別宮でここから逢坂峠に至る道筋には鷦鷯石と呼ばれる巨巖や、洞窟内に水流・滝・広場をもつ滝原窟など見るべきものがある。

大王崎—波切の町の東にそばたつ大王崎はこれに脈絡するいくつかの離礁と共に遠州灘と熊野灘を分け、怒濤さかまく断崖に白亜の灯台が映え、志摩地方の海礁風景を代表するものと云える。

英虞湾—前島半島に抱かれた本公園最大の入海で数多の支湾や島々が重なり合つて複雑な多島海風景を呈する。人文景観ではあるが狭い水道を渡つて志摩電車が入り込む賢島を中心に、巡航船が島や岬の間を縫つて静かな海面を四通八達し、釣に、帆走に、海水浴に、真珠養殖の見学に、尽きない興趣がある。沿岸も島々も第三紀層を基盤として洪積層を乗せた低段丘で、數十米に満たぬ丘陵がうち統一している。前志摩半島の金比羅山（一一メートル）、湾の東部の登茂山（四八メートル）は台地面の北西に一段抜た横山（二〇三メートル）と共に展望地点として優れている。

特に横山は英虞湾は勿論志摩全地を大観する展望地で、長い尾根を進むにつれて変化する景觀もこの公園有数のものである。

先志摩半島南岸—波切以西の半島部は先志摩と呼ばれ、北に英虞湾を抱き、南は熊野灘の怒濤に直面して、海女の生活に暖地性の植物を配し、ことに和具の沖合に浮かぶ大島はハマユウの群落や砂防植物群落もすぐれ、附近の暗礁は海女の絶好の宝庫である。

五ヶ所湾附近—五ヶ所湾の複雑な入り江は英虞湾附近より一段高いジユラ紀層の丘陵に囲まれ、島は少ないが紀伊山脈の山々も近く、黒潮を受けた眺望は雄大で、聳立する岸壁の間に相可浦・五ヶ所港などの明確な良港や真珠の養殖所などが点綴される。鬼ヶ城・細谷の暖地性羊齒植物群落—五ヶ所湾の北西穂原村にあり、山骨・巖壁を添景とした暖地性広葉樹林中に生じた群落で天然記念物に指定され、ことにアツイタ・キクシノブ・ナン

カクランはここが分布の北限で珍重される。

真珠—英虞湾を真珠湾と呼ばせる程日本真珠の声価を高くしたのは御木本氏の養殖真珠である。真珠は南北緯度三五度線内の暖海に産するあこや貝（真珠貝）・セイロン真珠貝・白蝶貝・黒蝶貝などに生ずるものが装飾用として価値が高い。天然真珠の



沈降海岸英虞湾 沈降地形の特色として出入りの多い伊勢志摩の海岸中でも、前島半島に抱かれたこの英虞湾ほど、大きな湾であつてしかも数多くの支湾や島々の重なり合つた多島海風景は他に見られない。ここに見える島々や岬は何れも第三紀層の侵蝕谷が沈降して海浸を受けた狭い水道となつたもので、これ等を見渡す横山は、この第三紀の台地を抜き出た標高 203 メートルの残丘であるが、地質は中生代ジユラ紀層である。

产地として古来最も名高いのはベルシヤ湾、次いでセイロノ島で、木曜島など南洋諸島では貝殻採取の副産物とされ、紅海・アデン湾・南洋・エネズエラなども有名であつたが近頃はすたれてる。伊勢志摩の天然真珠もベルシヤ湾のものに劣らない優秀なものである。

この国立公園は自然の中に織り込まれた人文景觀に著しい特色をもつ。志摩半島一帯は昔時御食國ともよばれ、海の幸豊かな樂土として知られていた。ことに神宮が祀られ、伊勢詣りが盛になつて、益々他国の人たちの関心が深まつてきた。一方温暖な氣候と海の幸はリアス式の凸凹の多い海岸線の到る所に漁村をそびて、しかもそれは内湾と外洋その他環境の変化によつて生活様式に自ら変化を生み、豊かな人文景觀を発展させた。春はあわび、わかめなど夏は真珠の母貝やあらめなど秋は伊勢海老をとる海女の作業も訪れる人たちには興味が深い。英虞湾を中心とする真珠の養殖は御木本幸吉氏の苦心の偉業で今日では海外に名高く伊勢神宮と共にこの公園の二大人文景觀といつて過言でない。明治二十三年御木本氏が英虞湾の多徳島で最初の母貝を沈めてから、大正二年に漸く形状光沢が天然の真珠に劣らぬものを得るまでの多年の努力は大きかつた。今では真珠の養殖は多徳島の対岸、大崎の入江にその本拠をうつして生産されている。天然真珠はベルシヤ湾、セイロノ島、木曜島などにあるが、志摩附近にも天然真珠があり、すでに奈良朝時代から採集されていた。

内宮（皇太神宮）は神路山の麓、五十鈴川のほとりに鎮座、天照大神が祀神で、外宮（豐受大神宮）は高倉山の麓にあり、五穀農蚕の豐受大神が祀神である。いずれも昔は宮中にまつられていたが、内宮は崇神天皇の御宇に宮中を出て大和、丹波、紀伊、吉備、大和を順次遷座の後、垂仁天皇の皇女倭姫命によつてこゝに遷され、外宮は内宮と同時に宮中を出られ、久しく丹波の國に鎮座されたが、雄略天皇の御宇にこの地に遷座された。

両神宮共正殿は唯一神明造と称され、三間二面切妻造平入の萱葺建築で、両者の差異は唯千木の上端が内宮は内削（水平切）であり、外宮は外削（垂直切）であること、と棟に並列された堅男木が内宮は十本、外宮は九本であることである。その直截簡明な建築様式は純日本的のものとされ、先年來朝したドイツの著名な建築家ブルーノ・タウトが「天から降つたような建築」だといつて讃嘆辭を惜まなかつたほどである。

お伊勢詣りは平安朝の頃から漸次盛になつたが、皇室の御祖先を祀る大宮なので初めは庶民の奉帛が禁ぜられていた結果、私人の祈禱奉賽を代行する御師が起り、室町時代には最も隆盛を極めた。御師は御祈り師のこととし、神宮の祠官が勤め、何々大夫と称し、豪華な自邸に參宮客を宿泊させたり神殿を設けて神樂を奏したりした。江戸末期にも宇治に三百、山田に五百を数える程であった。御師は御祈り師のことで、神宮の祠官が勤め、何々大夫と称し、豪華な自邸に參宮客を宿泊させたり神殿を設けて神樂を奏したりした。江戸の太平時代になると伊勢參宮は全国に亘つて上下民衆の嬉しい一生一度の旅路であつた。巨杉に囲まれた清浄な聖地の姿は一時一見に庵を営んだ西行の歌にもあり、彼を慕つて来遊し

た芭蕉の遺作にもうかがわれる。

二見浦は五十鈴川の河口から一糸と足りない白砂の浜を距てた東端一帯で立石崎の突端には興玉神社があり著名的な夫婦岩は海辺近くに突出している。古来から非常に名高く、夫婦岩の間から日がのぼる夏至からの数日間は特に訪れる人が増加する。そのほかこの国立公園の中から史蹟や伝説を拾うなら数えつくせないほど豊富である。

吉野熊野国立公園

指定 昭和 11 (1936) 年 2 月 1 日
拡張 昭和 25 (1950) 年 2 月 15 日
面積 55,378 陌

